

現代の問題点

- 1. **本を読む人減少** スマートフォンの普及により、減少。語彙の低下、思考力の低下に繋がる。
- 2. **古本問題** まだ、読める本が処分されたり、家に読まない本がある問題。

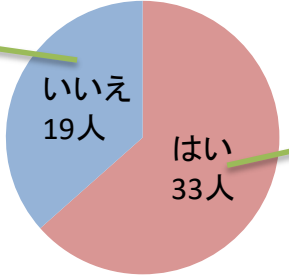


街インタビュー
・静岡駅前の地下道
・静岡駅前のバスターミナル } 計52人

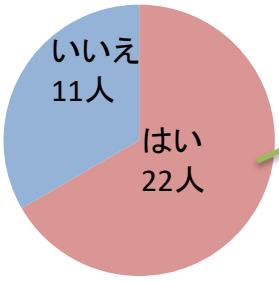
読書をするのは好きですか

はいの人で家に不要な本があるか

どうしたら読む?
帯が面白かったら。
時間があつたら。
人に勧められたら



スマホで読む人が多い。
・読むのは好きだけど、
頻度は少ない。



リサイクルに出す。
家の倉庫にある。



そこで提案

駅や公園など町の至る所に

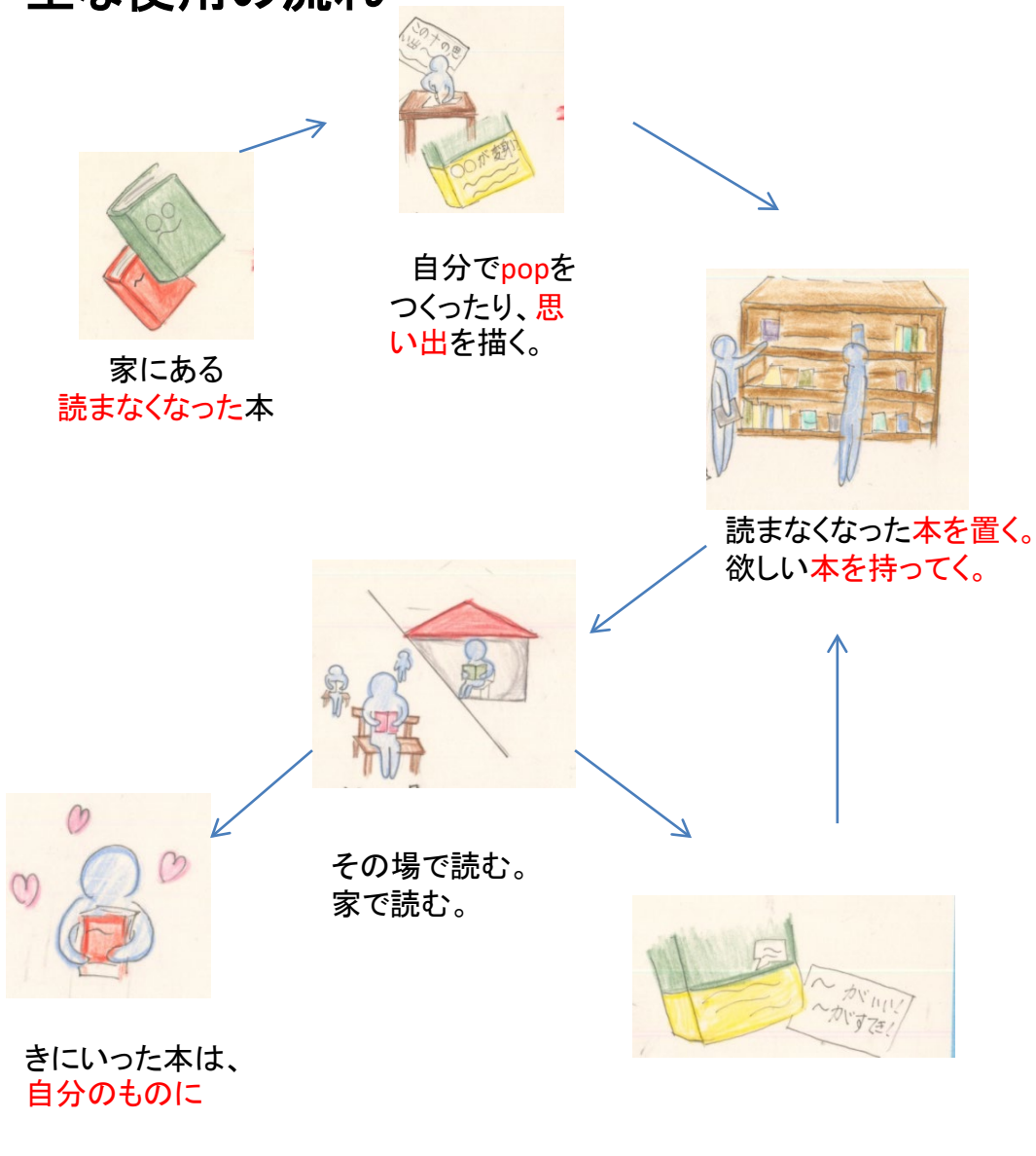
不要な本が誰かのもとへ

新たな本生



私たちは本を読むことが好きだ。しかし、電車の中や教室を見渡しても本を読んでいる人がほとんどいない。そこで、本を題材にして問題点を調べてみると、様々な問題があった。その中で、私たちは読書人口の減少による問題や、古本の問題に注目した。そこで、このような問題を同時に解決する方法としてだれでも利用できる本棚を提案する。実態を知るべく、街インタビューを行いながら考えた。

主な使用の流れ



街インタビューの反映



元の持ち主のその本に対する**思い出**が書いてあるといい



ポップがあると読みたくなる。

ポップや帯の例



まず、この本棚がどのように利用されるかのシステムを考えた。アンケートでどのようにしたら人の目にとまり、利用してもらえるかを聞き、それを反映した本のサイクルを考えた。

インタビューで得た意見



座って
読みたい



人目に
つく



人目に
つかない

本棚の設置場所について

雨仕舞の面を考慮して室内に設置を考える。場所や用途に合わせて、**大きさ、規模、形** を変える。

静岡駅の地下に設置する場合

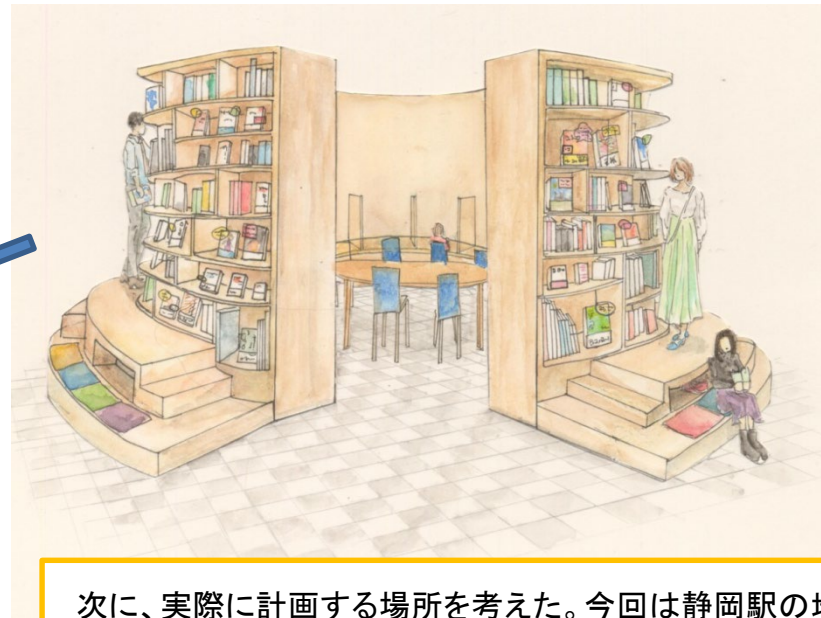


オレンジ色で囲われている範囲に設置。

大きさ

縦:約6.7m 横:約6.7m 高さ:約2.7m

※独自調査の結果です。



次に、実際に計画する場所を考えた。今回は静岡駅の地下に設置する場合を想定した。地下道周辺の平日の利用状況は、会社員や学生が多く利用し、休日は近くのデパートに買い物に行く人々の通り道となっていて、多くの人の利用が予想される。よって、サイクルが円滑に行われる。

インタビューを踏まえて

人目に付いた方がいいという人とつかない方がいいという人で**意見が別れた**。



本棚は、**目立つ**ようにして使いやすくし、読書スペースは、本棚で隠すようにすることで、目立たず**落ち着いた**雰囲気にした。

そして、インタビューを踏まえてより多くの人に納得してもらえるようなデザインにした。管理面については、より多くの人を楽しんで管理に関わる様なシステムにした。インタビューをする中で、とある年配の方に昔の本を多くの人に知ってほしいという言葉を受けた。しかし、古い本は表紙が現代風でなく、若者は敬遠しがちである。そこで、表紙を新たに自分たちでデザインすることで、楽しみながら手に取りやすい形にした。

管理について

Q.誰が管理するの？

A.地域の**高齢者**などが平日に管理、休日は**地域の人**や**ボランティア**の方で管理。

面倒だと感じてしまう人がいるかも

管理をともに行うことで、新たな繋がりができ、**新たな喜びや幸せ**に繋がる。

Q.本棚の現状を知るためには？

A.SNSなどで、共通のハッシュタグなどを作り誰でも現状を報告するようにする。

インタビューの反映

若い人にも、昔の本も知ってほしい。



表紙のデザイン、マジ重要！



表紙の**再デザイン**を自分たちで

人気のない本やあふれ出た本の生きる道

このような本は、中が見えないランダム式のドキドキわくわくわくの**自動販売機**のようなシステムにする。このようなシステムで**屋外の設置**が可能になる。

スーパー付近に設置する場合

スーパーの付近にあるから、料理本や食べ物に関する本がでる。



それぞれ、**場所に合ったジャンル**の本が出るようにする。

上に**小さな本棚**を置き、本のシェアをする。
※場所によってはできない場合もある。



子育て支援センターに設置する場合



自分でつくった本を、おける本棚をつくる。



思考力、語彙力UPに繋がる。

人気のない本の生きる道としてのシステムを考えた。普段自分で手に取らない本だからこそ、新たな本との出会いがある。子どもが自分自身で本をつくることで、絵心や想像力、思考力が上がる。このようなシステムを人々が利用することで、本を読む人が一人でも多くなり、捨てられる本が一冊でも減ることを望む。そして、これからはwith読書の時代となるだろう。